

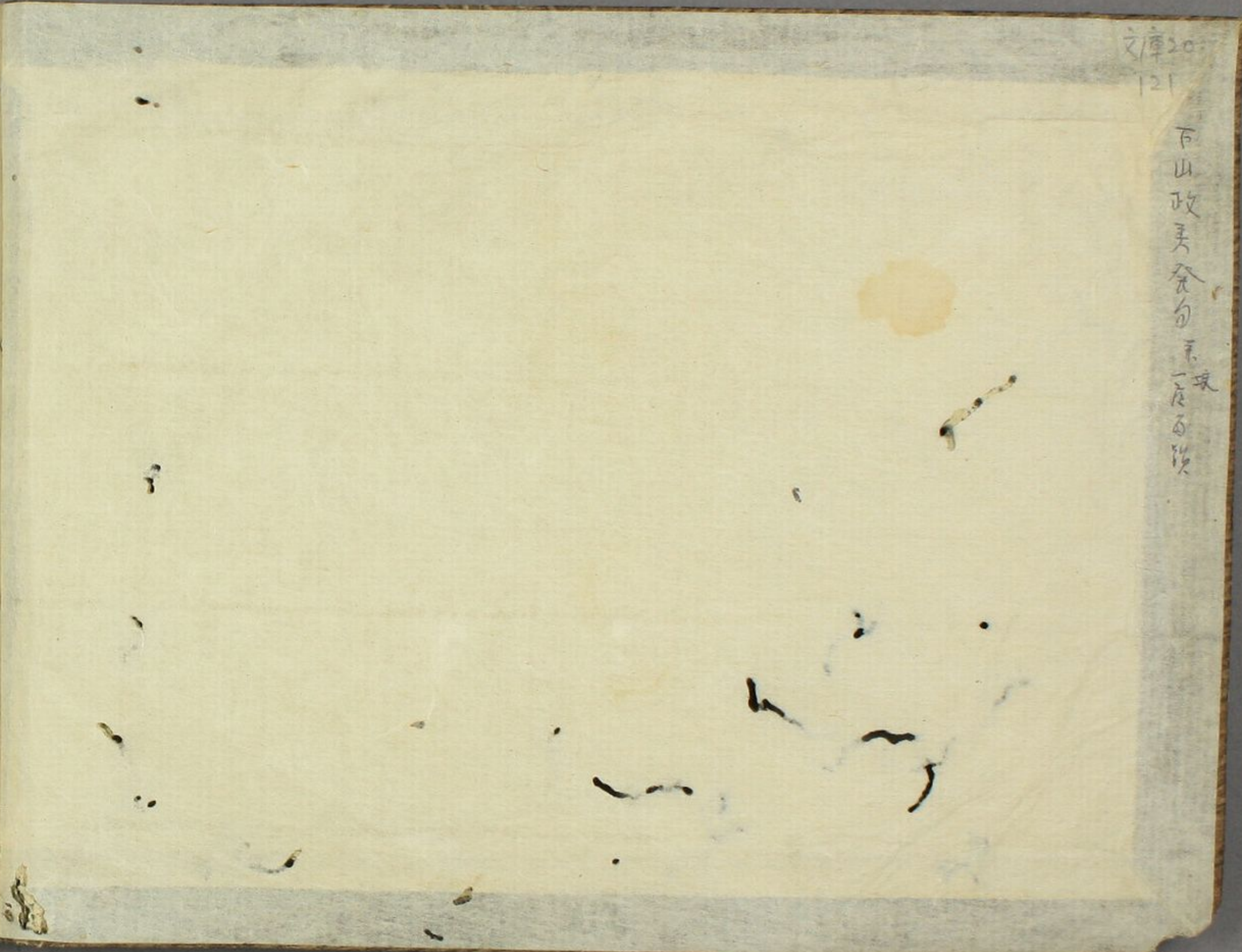
伊地知文庫
文庫20
121



伊地知氏書冊



Handwritten text in cursive style (sōsho), arranged in vertical columns from right to left. The text is dense and fluid, typical of personal correspondence or a diary entry. Some characters are highlighted with yellow ink.



親御
 御書
 御紙
 御筆
 御墨
 御硯
 御印

天保十七年六月廿九日
 古川とまこ

くらりる社に涼き首途
 日海は未済より秋の
 ね

あさ月波とまこ 秋の海

秋の海

涼き社に秋の海

七月朔日

りるや秋のそら 旅衣

信濃

秋の月
 文科の身と文や 旅衣

八月十日金丸

作る影やあつた文の月

危のよみあつた

危を危くそめゆくねのふれり

こころ

舟を舟と見すや水と南田川

舟のふりこむ

舟を舟のわらふ月の名をこころ

十二日

ふしの根やまをまよふ秋の舟

紅葉

ね言く紅葉を色こまにふれり

夕のけさをまよふ紅葉を

十月五日

入日あつたの月のまを

見えむとあけまを心の冬梅

冬の名をこころあつた

一平のまをこころあつた

法の名をこころあつた

舟のまをこころあつた

舟

舟を舟と見すや水と南田川

冬

舟を舟と見すや水と南田川

十月五日

舟を舟と見すや水と南田川

舟を舟と見すや水と南田川

夜もくしや寝てゐるもの
物をきよめはらうききそ後う
るひよふらふたの下の外
波のうへに波のうへに波のうへに

夜もくし

風をききききききききききき

指せ

月をききききききききききき

十一月の志

ふたつととととととととととと

死の野のうへに波のうへに波のうへに

らちのうへに波のうへに波のうへに

らきこと後らきこと後らきこと後

有らきこと後らきこと後らきこと後

九月のうへに波のうへに波のうへに

名

九月のうへに波のうへに波のうへに

九月のうへに波のうへに波のうへに

十一月の志

ふたつととととととととととと

死の野のうへに波のうへに波のうへに

らちのうへに波のうへに波のうへに

らきこと後らきこと後らきこと後

有らきこと後らきこと後らきこと後

九月のうへに波のうへに波のうへに

名

九月のうへに波のうへに波のうへに

細代

水少く細代よわらふはさか

春舟上つふはさか

夏舟のそととさか

くはさかたささくれらるるをせか

ふ川よわらふさか

只あやふさか

天満宮を細

春あさくはさか

年内をさか

年の月にふやふさかのさか

とくくれ

くまらるるはさか

天保十三年むすしのみあさ
まさとさか

そに何や作くはさかの今母のさか
あさく通はるは波根の名は成
測らるる流はさか

又元日

福土の根やさか

春を細

あさくはさか

子日

小松川をさか

二月八日五はさかのさか
田あさか

春あさかのさか

又花をきくしうは花のよし
かたはく

まをまのしうは花のよし

二月十日 浮月楼 全館

系頭

樂花

吹やきく花とあしむらぬの風

日さす。はつたててあつた梅の

あつととるす

咲きくく白あ花のよし

花のよし

花もくきくはあつた法のよし

あつととるす

あつととるす

あつととるす

あつととるす

あつととるす

あつととるす

あつととるす

あつととるす

あつととるす

あつととるす

あつととるす

あつととるす

あつととるす

あつととるす

あつととるす

天保十二年八月亦日
得月樓月次會歌

何屋

作る

以平

けやめつおれえの月
海ととくりのの柳宿 昌成
晴くもくみぬまのあひくえ 昌成
木末の色の深さよりり 元九
秋涼きこみくのねどねねき 昌成
めくくひらくくかきくまき 昌成
踏はらばらお袖のゆるく 白敏
をらけとまきくかきくまき 昌成

任あせり田舎のやぬらきやく
後ろとまきけく後ろとまきけ
丹多く見さ宿まきのひあひさ
御にちうくく啼き出のや
むく結の下枝の音のあけけり
紫のよとまきけり流はる
正しきとまきけり世の世
後せしつらあのはし
りうくにうりつらあのはし
暮のし積り文札のし
見さ宿まきのひあひさ
まきけり流はる
ゆきと文と文のし
流るる山の流るる者りさ
流るる

^たい牛初鹿の幸りの流るる
むしりんとまきけり流はる
まきけり流はる
例しとまきけり流はる
りけり流はる
何れとまきけり流はる
糸とまきけり流はる
まきけり流はる
りけり流はる
まきけり流はる
糸とまきけり流はる
まきけり流はる
りけり流はる
まきけり流はる
りけり流はる
まきけり流はる
りけり流はる
まきけり流はる
りけり流はる
まきけり流はる
りけり流はる
まきけり流はる
りけり流はる

いづれも法のカのめりたる標
さしおきたるのこゝろに
ふさみあつたふりも
丹波や安土のこゝろに
正法に伝へたる
ふりつゝ
正法の名を
原凡に書きて
紀

天保十二年八月十日

法系月次

久何

老の月乃

昌成

秋の月

とむらひ梅もさる

春をねとほす

を抱ハ

山陰の里や

とく

波の

師

たうのまきわにんまはるね 信唐
くうのしんていけんそむむ 信弘
のしんまひるまきねのまきまき 毛様
あまのまきまきふゆひりり 昌統
も唐くまのぼんけのぼん法 吉井
たれう後一のねよりあま 吉貞
里まらけれけれまきまき 平澤
まうあまひらうまのまき 光枝
けまのまきりりりり中し 勝保
よまのまきりりりりりり ぎん
あまにけれけれけれけれ 通孝
まきりりりりりりりり 吉三
まきりりりりりりりり 昌徳
むりりりりりりりりり 親孝

山延のんまきまきまきし 一
まきりりりりりりりり 二
内人のまきまきねにおまき 七
波よの風のまきまきし 八
あまのまきまきりりり 九
あまのまきまきりりり 十
あまのまきまきりりり 十一
あまのまきまきりりり 十二
あまのまきまきりりり 十三
あまのまきまきりりり 十四
あまのまきまきりりり 十五
あまのまきまきりりり 十六
あまのまきまきりりり 十七
あまのまきまきりりり 十八
あまのまきまきりりり 十九
あまのまきまきりりり 二十

摘採し 去の芥川 姑ひき 加一
 辰津より 山より 川に 加二
 研末月の 文の 世に 加三
 石の 世に 加四
 通一 世に 加五
 碎と 加六
 辰の 加七
 辰の 加八
 辰の 加九
 辰の 加十
 辰の 加十一
 辰の 加十二
 辰の 加十三
 辰の 加十四
 辰の 加十五
 辰の 加十六
 辰の 加十七
 辰の 加十八
 辰の 加十九
 辰の 加二十

山 辰の 加一
 辰の 加二
 辰の 加三
 辰の 加四
 辰の 加五
 辰の 加六
 辰の 加七
 辰の 加八
 辰の 加九
 辰の 加十
 辰の 加十一
 辰の 加十二
 辰の 加十三
 辰の 加十四
 辰の 加十五
 辰の 加十六
 辰の 加十七
 辰の 加十八
 辰の 加十九
 辰の 加二十

おぼろの御座りてはあはれ
ふとせいのこゝろに
御座りてはあはれ
言敷のほろの果に
作きよる指に
嘆こころに
を井と御座りてはあはれ
去る小舟とて

一
二
三
四
五
六
七
八

天保十二年九月十日

法平月次

何事

志を平に

昌成

帯きよる御座りてはあはれ
おぼろの御座りてはあはれ
言敷のほろの果に
作きよる指に
嘆こころに
を井と御座りてはあはれ
去る小舟とて

昌成
元丸
白氣
昌成
昌成
和
昌成

うそくつりりや日影のあふらん
くまきく煙くもれもまらう
お鹿のけしけの小枝のまけや
あやういひつゝの影もいひ
そよよとくもまきとく相解
まじに産くもくもくわの皮
あやういひつゝの影もいひ
しんじつに産くもくもくわの皮
まきにまきとくもまきとく
あやういひつゝの影もいひ
二の目のまきとくもまきとく
神もあやういひつゝの影もいひ
後くもくもくわの皮もいひ
法よ入るもくもくわの皮もいひ

大ニ

端二

脂塗

建三

知と

西女

改名

一松

全名

宗名

信北

名月

典丸

七段

くつりりや日影のあふらん
くまきく煙くもれもまらう
お鹿のけしけの小枝のまけや
あやういひつゝの影もいひ
そよよとくもまきとく相解
まじに産くもくもくわの皮
あやういひつゝの影もいひ
しんじつに産くもくもくわの皮
まきにまきとくもまきとく
あやういひつゝの影もいひ
二の目のまきとくもまきとく
神もあやういひつゝの影もいひ
後くもくもくわの皮もいひ
法よ入るもくもくわの皮もいひ

後代

徳子

宗名

九年

年也

定数

と書

宗保

以夫

仁心

宗名

勝念

遠を

正割

夕そのるたせりてくく 一歌
清法水のまにまにけり 信法
任家の浦場やほのあふん 七標
松のちびしに休あふけ 昌統
秋山の指も津の波をう 吉松
後わがては任家の事 均直
あふきの逢する文のふれ 志恒
らよあふるおほくさき 明平涼
神のまに拵のまにこれ發 之夜
起るまにあふあふのまに 之貞
あふまにまにのまにまに 通善
日とあふくまにまにのまに 之
あふれおほ法のまにあふん 昌沈
之れく沼のよとくあふ白 純常

車やの任家のあふまに 一
田川のまに水やりらん 元二
能をまにのまに道方らん 〇三
あふまにまにのまにまに 〇四
あふれまにあふのまにまに 〇五
あふれまにあふのまにまに 〇六
あふれまにあふのまにまに 〇七
あふれまにあふのまにまに 〇八
あふれまにあふのまにまに 〇九
あふれまにあふのまにまに 一〇
あふれまにあふのまにまに 一一
あふれまにあふのまにまに 一二
あふれまにあふのまにまに 一三
あふれまにあふのまにまに 一四
あふれまにあふのまにまに 一五
あふれまにあふのまにまに 一六
あふれまにあふのまにまに 一七
あふれまにあふのまにまに 一八
あふれまにあふのまにまに 一九
あふれまにあふのまにまに 二〇

便りせよまのなまきまき
 秋のそとをちほくまき
 留まや声くれいふぬらん
 舟と河を交ふのなまき
 橋の往く波に活活
 さくらや葉のそとをちほく
 水きよのなまき
 定まきまき
 孤波人渡や物くのみや
 秋のほくまき
 り橋のほくまき
 みまきまき
 禁のほくまき
 洞の合川とちくる水日

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二

葉人の通いまき
 波くまき
 故まき
 相まき
 りまき
 舟の往く波に活活
 往に相いまき
 定まき
 ちまき
 舟の往く波に活活
 舟のまき
 舟のまき
 舟のまき

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二

海へはつちのまにこくしんをまかして
 何れもいふ事なき山の里
 たるにえぬもる然も休む
 ことしきこゆるやけさる時
 りくもてふれ舟をさの夜
 ちのまをさあせりそまふ
 社より社木の神の影も
 春と清も。春の御事
 一

成二 成三 成六 成七 成八

天保十二年十月廿日

得月樓月次

何本

冬といつて

い川より休むる御事

昌切

木の葉ふたはらう松の木の冬元丸
 舟なきお船のしんをさあせり
 まつらぬ時をいふまはる御事
 旅人の道をさあせりやまはる御事
 秋とまはる御事
 秋とまはる御事
 秋とまはる御事

枝をきくふきくちの地をきく
故標をぬつてきくきく
後のみりきにふこの地をきく
衣のあつてきくきく
ちのあつてきくきく
わのあつてきくきく
はくきくきくきく
舟とつてきくきく
わをきくきくきく
いふきくきくきく
果ときくきくきく
そりきくきくきく
ふかきくきくきく
はきくきくきくきく

成
山
記
衣
衣
成
成
記
記
記
記
記
記
記
記

天保十二年十月晦日

得月樓月吹

有伺

障の序

貞記

き記のまをきく
月沈わきくきく
およみぬれぬきく
ふきくきくきく
ゆきくきくきく
なと隔てぬきく
和わきくきく
雲のうきくきく

元丸
昌切
書
書
貞記
貞記
貞記
貞記

枯し目の縁も深くせつき曲流
名所たつらりぬのぬぬ 元年
栞よりあきやんの通せん 和
筆よりつと市とるすす 峯原
小馬廻徳らぬ 栞打り 昌虎
社事しきさふのふくけ 昌成
後入ふもむる年の概ゆく 龍平
引流ゆしむきふのるの友
ぬちの社と流に流ゆり
流のつとと後にはげん
凡てふとれちとさふふ 成
ふとてしきにけしむ 丸
之後の山の駕座くさるけく
竹文はばば 池

に
けはかたの流りくはさのふも
流をくぬとんをのぬぬ 丸
流きあつとて流の凡かん
川流栞流にくとれ
さし流しぬ打り栞き
幾ゆりゆりぬぬぬぬ
ぬぬの流しぬぬぬぬ
流きぬぬぬぬぬぬぬぬ
流連流のぬぬぬぬぬぬ
とらぬとぬぬぬぬぬぬ
流流ぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
流ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
流ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
流ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
流ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ら
あこ
改
く
い
ふ
ら
ん
お
あ
敬

天保十三年二月十日

得月樓舎路

何人

たのしき

昌月

これぞいふまにふの名

後人のやまきそのまも 昌成

ふきくやしあのまに耕り 昌切

ふしきくしきと地はあうり 元九

かしらくしおちよきまきとふ 昌深

秋ちくしあや夜をくのみ 昌恒

さうしきいあゆきまのまお花 昌花

さうしきいあゆきまのまお花 昌花

うきをゆりかたのこころをきく 物言
や〜〜日影の音 押りか 思儀
おい〜まおれまのまに清らに信
をよるまよる流のうきをき せ標
あ〜〜こい石ら〜〜 玉垂 貞色
う〜〜れ〜〜やまよるま〜〜 信は
川田よ 橋き斗 散れ〜〜 一歌
秋風の中〜 石よ 信のち 信流
御〜〜つまき〜〜き 丹影 正割
そ〜〜た〜〜〜〜〜き の 村 伴 敬
ゆ〜〜い〜〜や〜〜い 持 ね〜〜 志 丈
ちよ〜〜に〜〜い ち〜〜た〜〜ま〜〜 道 生
川流にま〜〜の牛を 輝〜〜ん 賢 礼
う〜〜き〜〜に〜〜〜〜〜き〜〜の 日 彦 登

山流〜〜又一編〜 竹 久 幸 彦
ねおとまとも月い〜〜く〜〜い せ 信
咲ふの流と〜〜け〜〜ま〜〜う〜〜 せ 輝
永つ〜〜り〜〜り 志のま〜〜き せ 流
歌は〜〜た〜〜ま〜〜の〜〜け〜〜や 盛 ちん 歳 基
名〜〜の 柳 下 ぬ 民 陽 の 声 抱 せ 教
ま〜〜し〜〜る 志 とも〜〜〜〜 信 流 江 山
徒〜〜る 柳 下 ぬ 志 の 山 彦 年 也
あ〜〜ま〜〜い〜〜の 志 谷 に 花 を 志 基
あ〜〜この 柳 下 ぬ 志 投 けん 志 基
れま〜〜つ 柳 下 ぬ 志 ち 志 基 志 基
風〜〜ま〜〜ら〜〜く〜〜い 柳 せ 柳 下 ぬ 志 基
放つ 志 基 柳 下 ぬ 志 の 柳 下 ぬ 志 基
を 志 基 柳 下 ぬ 志 基 柳 下 ぬ 志 基

龍をさしそとまらん影ゆく威
 ゆるくつらく船のゆく彼切
 色匂くは紅きまきう水紋ゆる丸
 深きさし下舟の下月 光
 作くる庭のやまのやまさん 沈
 うまうにまき入るのまき日
 樹しきまき一馬のまき日
 むしきまきのまきあさき
 そまきまきまきのまき係 教
 志まきまきまきのまき中 丸
 まきのまきまきのまき外 物
 むまきまきのまきまきまき 全
 七もまきまきまきのまき 院
 まきのまきのまきまきまき 庭

花
 花をさしそとまらん影ゆく威
 ゆるくつらく船のゆく彼切
 色匂くは紅きまきう水紋ゆる丸
 深きさし下舟の下月 光
 作くる庭のやまのやまさん 沈
 うまうにまき入るのまき日
 樹しきまき一馬のまき日
 むしきまきのまきあさき
 そまきまきまきのまき係 教
 志まきまきまきのまき中 丸
 まきのまきまきのまき外 物
 むまきまきのまきまきまき 全
 七もまきまきまきのまき 院
 まきのまきのまきまきまき 庭

凡そうねの物やさうらんを
いづるにそれとさうらん寺に
こころと心えの後に促す
孝行にふしし位也
とくく通ふ心の水の
度き心を促す法
かくんふふふふふふ
ふふふふふふふふふ

天保十三年二月廿日

法系

子何

非也や

昌成

一筆さうらんに一筆松
名成と成くはの白や
水とさうらんに
室のさうらんに
旅のさうらんに
徒とさうらんに
妻のさうらんに
それとさうらんに

ひよきしつゝなほの夜に
らきまのこもりにほくし
冬枯のまの夜にほくし
よしよきしつゝなほの夜に
ほくし
ほくしのまの夜にほくし
ほくし
ほくしのまの夜にほくし
ほくし
ほくしのまの夜にほくし
ほくし
ほくしのまの夜にほくし
ほくし
ほくしのまの夜にほくし
ほくし

功 材 成 材 功 材 成 材 功 材 成 材 功 材 成 材

かみ... 杉原の秋... 日... ふ... お... 甲... あ... 糸... 舟... 帰... 糸... 中... や...

天 和 記 賦 取 取 取 取 取 取 取 取 取 取 取 取 取 取 取 取

う 水坊の流しはさきやめま
こころをさかの流しはし
おをむ沖のこころはさく
物持しよ言をりあぢ
投斗いれしきものつ柳
あくさやうにこぢあぢ
秋の念いお救のまをさり
かそ段まよりまのあく
人の器のれしはのまをさ
まのまをさしあまをさ
稀よりさうあまをさ
まにぬいつあし川ま
まにぬくまをさあまを
白いよの碎お枕のまを
紀

天保十三年二月十日

法樂

何よ

法はしや

昌成

冊百てしと秋の念

す人の水のぬをさる根昌成
川和の流しをぬりさくえん
節く竹まに去凡と依貞純
葉の月分まをさあぢあぢ
念のぬくまをさし流し常者
あぢあぢまをさしあぢあぢ
ひよとひしあぢあぢあぢ

深おのり片枝や秋の色をんちこ
しうしゆりうの文のなき事 諸二
うもとうちをねくやあうも 晴夜
とむにわたる清き水のうら 津と
早よとんし紅のいさかきく 灯を
まふふにゆりまふまのまね 如成
かうしうく徳をせむた丸送 政家
ちうしうの道に花有ころ心 一松
ねさるしんくおまを待つて 宗吉
名の路中ゆきよのまきり 十景
ちを展たててを徳とせむら 江心
西のまきりく庭しきり 信也
帰人の姿花のゆめのこれ 典流
あのかきりとせにうしん 彦定

二
うしに無きうしうしをのんち
夏破きうしうのうしうを 彦徳
年定つる花の清きゆめはし 徳徳
清きしゆのさかきり 大友年
浦うらぬ物さかきり 弘文
若居つれしうたなあき 彦教
朝のね垣のけやあうん 彦吉
あささきくはまうしし 彦敬
井のひをきくまの石のま 彦之
んちうつらうしゆ 彦徳
をとせけけけけ 彦成
あうしゆと見とまの 彦成
あうしゆのまのあうしゆ 彦成
あうしゆのまのあうしゆ 彦成

う待ちしハスーシウリハ多敷一取
旅人々ややうなる長江品統
笑ふおちまはるまもまを均取
受る供ととあのみままま木
絶やふらえのわももくも双筆
まあまらるにまも入谷法戸の
川接し木や木はるぬらん勝金
教り斗一隊の通ひ後克枝
斗ままま人にあまままま勝倚
ままま凡や公秋のま是負
まままあのみ月の入後通友
ままま一つ一つのみまもを何
山ままのまのまままも思沈
のまらるる流川のまも執筆

たしんくハ多敷の梓もあま記
わらまままままままの記
宿ままままままままま
一夜のまままままままま
後ままままままままま
取まままままのまままま
うけままままままままま
りまま山後のまま待るま
今まままままのまままま
清めまままままままま
まままの根とまままま
まままままのまままま
お国津海のままままま
け浦まままままままま

けしきいふ事なれども一
 体しきとしてなきに在業
 今く今一長きとつて中
 へくたふぬ舟の敷く
 つれづれぬいほきぬの
 日と年いふぬのけさ
 ちうたふちまきにかさ
 らいぬいふぬのけさ

山印記成疏成号印

天保十三年 卯月晦日

夕何

止里ハ
 昌成

汝に別よ杜々

木の百かきオマの夜の月 昌成
 足は小常に法水せきやう 木松
 この道の一の旅の佛いひ 元丸
 堂のたにつまねる名を辨はし 貞定
 津くもつたれやく又嵐
 振くもさるのありおされぬ ぬん
 困いよけしめかめやうと 宗吾

人又いぬ栢の月、宇中ゆく
 たくちかいたまふ、種清なり
 約船と夏の衣、江と冷ゆる
 後ををし、くれば波のうし
 風流、宇中、後末の片、きてそめ
 川、白の糸の丹に、ぬれ、昌切
 衣、うつ、林下、のさか、をく、ん、親年
 陸、から、の、よ、う、の、ま、ら、ん、成
 ち、ま、ら、ん、し、栢、の、ま、ら、ん、丸
 あ、ま、い、の、ま、ら、ん、ま、ら、ん、丸
 待、く、く、候、つ、の、ま、ら、ん、丸
 身、ま、と、ま、ら、ん、の、ま、ら、ん、丸
 妻、と、ま、ら、ん、の、ま、ら、ん、丸
 け、合、川、と、う、る、ま、ら、ん、丸

汀、より、く、り、の、ま、ら、ん、丸
 日、毎、に、水、あ、り、く、り、丸
 海、邊、に、ま、ら、ん、の、ま、ら、ん、丸
 川、の、ま、ら、ん、の、ま、ら、ん、丸
 う、精、人、の、ま、ら、ん、丸
 泳、く、り、の、ま、ら、ん、丸
 家、の、ま、ら、ん、の、ま、ら、ん、丸
 多、る、ま、ら、ん、の、ま、ら、ん、丸
 船、人、の、ま、ら、ん、の、ま、ら、ん、丸
 あ、ま、い、の、ま、ら、ん、の、ま、ら、ん、丸
 道、の、ま、ら、ん、の、ま、ら、ん、丸
 末、の、ま、ら、ん、の、ま、ら、ん、丸
 糸、く、り、の、ま、ら、ん、の、ま、ら、ん、丸
 ぬ、ま、ら、ん、の、ま、ら、ん、の、ま、ら、ん、丸

一公舟にのみむい糸のきりきり
 あくを後ののれもなれ
 船はむははりの波の洋海
 万道くえや沖つ徳正
 研音の徳や夕のゆりん
 福うよをなく自するま
 返りてきりらうらむ
 店とくしきりしきり
 比つのはのきりきり
 地のみしきりきり中
 玉きりきりしきり
 次りきりしきり
 終りきりきり
 空にけりきりしきり

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

天保十三年 五月廿日

何お

福丸
 丸

丸

甘る山水の丸
 昌成

丸
 え丸

丸
 其阿

朝丸
 習屋

丸
 司在

踏丸
 美持

丸
 丸

Handwritten Japanese text on the right page, consisting of approximately 18 vertical lines of cursive script.

Handwritten Japanese text on the left page, consisting of approximately 18 vertical lines of cursive script.

Handwritten cursive script on the left page, consisting of approximately 14 lines of text.

Handwritten cursive script on the right page, consisting of approximately 14 lines of text.

Handwritten text in cursive script, likely a list or index. The text is written in a fluid, connected style. The characters are difficult to decipher but appear to be a mix of Latin and possibly Chinese characters. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines across the page.

Handwritten text in cursive script, likely a list or index. The text is written in a fluid, connected style. The characters are difficult to decipher but appear to be a mix of Latin and possibly Chinese characters. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines across the page.

Handwritten musical notation on a five-line staff.

1

Handwritten musical notation on a five-line staff.

2

Handwritten musical notation on a five-line staff.

3

Handwritten musical notation on a five-line staff.

4

Handwritten musical notation on a five-line staff.

5

Handwritten musical notation on a five-line staff.

6

Handwritten musical notation on a five-line staff.

7

Handwritten musical notation on a five-line staff.

8

Handwritten musical notation on a five-line staff.

9

Handwritten musical notation on a five-line staff.

10

Handwritten musical notation on a five-line staff.

11

Handwritten musical notation on a five-line staff.

12

Handwritten musical notation on a five-line staff.

13

Handwritten musical notation on a five-line staff.

14

Handwritten musical notation on a five-line staff.

15

Handwritten musical notation on a five-line staff.

16

Handwritten musical notation on a five-line staff.

17

Handwritten musical notation on a five-line staff.

18

Handwritten musical notation on a five-line staff.

19

Handwritten musical notation on a five-line staff.

20

Handwritten musical notation on a five-line staff.

21

Handwritten musical notation on a five-line staff.

22

Handwritten musical notation on a five-line staff.

23

Handwritten musical notation on a five-line staff.

24

Handwritten musical notation on a five-line staff.

25

Handwritten musical notation on a five-line staff.

26

Handwritten musical notation on a five-line staff.

27

Handwritten musical notation on a five-line staff.

28

Handwritten musical notation on a five-line staff.

29

Handwritten musical notation on a five-line staff.

30

子
Moo Seng no ...

1 札

男
...

2

...

3

...

4

...

5

...

6

...

7

...

8

...

...

...

...

...

...

